

大学生の依存傾向に関する検討—質問紙調査および投影法検査を用いて—

伊垣知美

玉木健弘

樋町美華

福山大学大学院人間科学研究科 武庫川女子大学文学部心理社会福祉学科 福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：依存傾向, 友人関係, TAT

はじめに

青年期における友人関係は、親密で内面を開示するような関係、あるいは人格的な賛同や、同一視をもたらすような内面的友人関係を特徴としている(岡田, 2007)。一方で、現代青年の友人関係の特徴として、自分の内面を開示することを避け、互いに傷つけあうことを非常に恐れるなど、形だけの円滑な関係を求めるといった傾向が指摘されている。それにも関わらず、大勢の中に自分をおいて安心を求めようとするといった傾向が強く、いつも仲間といようとすることが増えてきているといった現状があることが示されている(松尾・小川, 2000)。岡田(1993)は、大学生の友人関係から、深刻さを回避し楽しさを求め、友人と一緒にいることを好む「群れ志向群」を見出している。この群に見られる「友人と一緒にいることを好む」という特徴は、1人であることを嫌うということの意味していることから、依存傾向の一種である依存欲求の強さを表わしているのではないかと考えられる。

日常的にみられる対人場面において、頼る相手がいるということは両者の間に良好な互恵的な友人関係が築かれているとされている。この両者の間に十分な信頼関係が築かれている関係において、他者に頼り自分に必要なものを補うことはむしろ適応的であると考えられる(竹澤・小玉, 2004)。一方、過度に現れる依存の特徴として、信頼関係なく同調行動をとる者はただ集団から外れまいとして群れているだけであるため不適応的・病的な依存であるといえる(竹澤・小玉, 2004)。そのため、過度な依存や不適応的な依存が対人関係の形成や維持に支障をきたすことが考えられている。しかしながら、現代青年の依存性の特徴として群れているといった行動が挙げられているが、必ずしも「依存性＝群れ」という行動に直結することが証明されているわけではない。そのため、現代青年の依存がどのような性質を持っているのかを、質問紙を用いて測定する必要があるといえる。

人は成長とともに乳児が母親に示すような特定少数の対象だけに集中した依存を示すのではなく、複数の様々な人物と様々な形で依存関係を結ぶようになる。これを支持するように、近年の発達研究では自立という現象が依存の逆の性質ではなく、変形または成熟した状態であるとする考え方が示されている(西川, 2003)。さらに安達(1994)は、青年期に父・母・友人・恋人など、自身の周囲にある重要な他者の果たす役割について比較、検討し、葛藤の解決や自己の安定において友人が大きな役割を果たしていることを明らかにしている。

そもそも、日本における依存性の研究は、幼児を対象に行った津守・稲毛(1960)によるものを契機に、近年では青年期における依存性の問題や社会的同調性の問題、依存性概念の検討の問題など種々の角度から独自の研究が進められている。さらに、適応的意義に注目した研究も行われ、これらは各発達段階における依存の様相や構造を検討した研究と、他の心理特性との関連を検討した研究に分類される(竹澤・小玉, 2004)。

しかしながら、これまでに行われてきた依存性の研究は、依存性とは何か、あるいは何を依存性と呼ぶかについてはいまいなまま進められてきたため、明らかでない点が存在している。その中でも、一致している点として、「人間対人間についていうもので、社会的行動のひとつの形式であって、他人との接触あるいは、他人からの擁護によって生ずる満足に向けられた行動をあらわす」ということが挙げられている(Hartup, 1963)。

そもそも依存性の研究は、当初は親子関係に伴って発生する現象として検討されており、日本においては高橋(1968)により、依存の構造について検討されたものがある。高橋(1968)は依存性を「道具的な価値ではなく、精神的

な助力を求める欲求である」と定義し、依存欲求尺度を作成している。また、Kagan & Moss(1960)はこれまでの研究結果から、依存には「愛情・受容・保証の追求を強調する情緒的依存欲求」と、「問題場面における援助を強調する道具的依存欲求」という2種類の下位尺度を見出している(竹澤・小玉, 2004)。一方、関(1982)は依存性を、自律性と対立するものではなく逆に成熟した人格に不可欠であるという立場に立って、依存性の在り方と適応との関連を明らかにしている。その際、高橋(1968)の考えを元に依存性を広義に定義し、3分類している。第一は、特定の相手とともに常に直接的な強化を受けていないと安定し得ず、行動も起こせない、自己の行動の準拠枠として絶えず他者を必要とする未分化で未熟なあり方である「依存欲求」。第二は、依存することへの不安から他者を受け入れず、全ての人に関心を示さない「依存拒否」。第三は、自己の立場から判断、行動でき自立的であるが、同時に他者にも関心を示し、暖かい相互的な関係を享受できるという成熟した人格に備わっているあり方である「統合された依存性」である。関(1982)は、適応上肯定的な意味をもつと考えられる依存性の在り方として、この「統合された依存性」の概念を導入している。このような概念は、成熟し安定された人格に備わっているべきものであり、また他者との相互依存的で良好な関係を保ち、且つそこから得た安定感を基礎として自立的になるために必要不可欠な存在であるといえる。

このように、依存性についての特徴は示されているが、それがどのように友人関係において作用されているかが明らかにされていない。そのため、本研究では現代青年である大学生の友人関係において発生する依存性の役割について、質問紙および投影法検査によって明らかにすることを目的とする。先述したように、先行研究では依存性についての定義が一貫して定められていないため、本研究ではHartup(1963)の提唱した一致点を参考に依存性を「是認、支持、助力、保証などの源泉として、他人を利用しないしは頼りにしたいという欲求」とし、関(1982)の作成した依存性の自己評定質問紙を用いることにした。これにはKagan & Moss(1960)や、田中・高木(1997)が提唱した「道具的依存」と「情緒的依存」という2つの下位尺度を含み、さらに関(1982)が新たな概念として追加した、「統合された依存性」である「成熟依存」も含まれている尺度である。

さらに、依存性に関する先行研究ではEdwards(1954)によって作成されたEdwards Personal Preference Scheduleから3つの下位尺度である恭順、救護、服従を選択し使用したものや、Navran(1954)がMinnesota Multiphasic Personality Inventoryの項目を用いて作成した依存性尺度(Dy尺度)を用いるなど、質問紙法のみを用いて行われていることがほとんどであった。そのため、これまで依存性がどのような役割を果たしているのかといった研究では、依存性について表層から推測しているにすぎなかった。本来、依存性は発達に伴って変容するものとして捉えられていることから(高橋, 1968)、個人の内的世界が関連することが考えられる。したがって、表層からの推測のみでは依存性の本質について明らかにすることができないと考えられる。以上のことから、現代青年の依存性について、投影法を用いて検討することが必要であると考えられる。

そこで本研究では質問紙の他に、無意識レベルを測定することができるとされる投影法を用いることとする。本研究において用いる投影法はTAT(主題統覚検査)であり、Murrayを中心とするハーバード心理学クリニックのスタッフが1943年に完成させた投影法の1つである。絵画刺激の捉え方や物語の作り方の中に、個人の内的世界の投影が期待されるものであり(原田, 1999)、内在化された人間関係世界の分析に有効な手法であると考えられている。これまでの依存性とTATの研究に関しては、Kagan & Mussen(1956)によって検討されている。このように、依存性について表層以外の側面から測定するために投影法を用いて検討しているのはこの他にほとんどみられない。以上のことから、現代青年である大学生の友人関係間において発生する依存性の役割について、質問紙およびTATの反応分析によって明らかにすることを目的とする。

方法

調査参加者 大学生で調査参加に同意した男性15名、女性15名計30名(\bar{X} =20.8歳, SD =0.8)が検査に参加した。

検査期間 2009年5月から2009年6月までの間に行った。

調査材料

(1)依存性の自己評定質問紙

関(1982)によって作成されたものを、対象者が友人に限定されるように一部改変して用いた。「依存欲求」「依存の拒否」「統合された依存」の3因子全30項目で構成されている。「まったくあてはまらない(1点)」「あてはまらない(2点)」「あてはまる(3点)」「非常によくあてはまる(4点)」の4件法で回答を求めた。

(2)早大版IAT

戸川を中心とした臨床心理学会(1953)が作成したものであり、図版は練習用を含めて全部で18枚あった。練習用を除いた16枚の中から、心理学科教員1名と、検査者を含めた心理学を専攻している大学生9名の計10名に、『「是認、支持、助力、保証などの源泉として、他人を利用しないしは頼りにしたいという欲求」という定義に当てはまると思われる図版を相談により選択してください』と説明したうえで、上記の定義に基づいて6枚の図版を選択した。

以下に、本検査において使用した図版の番号および名称を示す。

図版 2:『汽車の中の少年』, 図版 4:『お人形を持つ少女』, 図版 5:『街角の父母と子』, 図版 6:『ポスターと女と男』, 図版 7:『公園の風景』, 図版11:『部屋を覗く少年』

使用器具 シャープペンシル。消しゴム。ICレコーダー。秒針付きの時計。

教示 『今から8枚の絵をお見せします。その絵を見て何かお話を作ってください。と言っても別に難しく考える必要はありません。お話の中にこれまでどんなことがあって、今はどうなっているか、またこれからどうなっていくのか、などを内容に入れながら、1つの簡単な物語を作ってください。お話はだいたい3分ぐらいで話せる短いものでいいのです。絵は8枚あります。1枚ずつあなたに渡していきますから、1枚に1つずつ話して下さい。お話が終わったら絵を机に伏せてください。』

手続き まず、教示をした後練習版を2枚実施し、参加者が趣旨を理解できていれると判断した場合、続けて6枚を実施した。検査者が、参加者が趣旨を理解していない(絵を見て物語を作るのではなく、絵の説明をするなど)と判断した場合のみ、教示をもう一度繰り返した。

結果

1. 依存性尺度における得点の平均値および標準偏差

依存性の自己評定質問紙について、各因子の平均値と標準偏差を男女別に算出した。さらに、各因子における性差を検討するため、 t 検定を行った(Table 1)。その結果、すべての因子において、男女の間に有意な差は認められなかった($t(29)=.39, n.s.$; $t(29)=1.93, n.s.$; $t(29)=.79, n.s.$)。

Table 1 各因子における平均値と標準偏差

	男子		女子		t 値	p
	平均値	SD	平均値	SD		
依存欲求	25.1	(6.5)	25.9	(4.5)	0.39	$n.s.$
依存拒否	19.6	(3.7)	22.6	(4.8)	1.93	$n.s.$
成熟依存	26.5	(5.3)	27.6	(4.8)	0.79	$n.s.$

質問紙で得られた結果が、TATにおいても認められるか検討するために、まず質問紙の相関係数を求めた(Table 2)ところ、依存欲求因子と成熟因子との間に、中程度の正の相関が認められた($r=0.53, p<.01$)。依存欲求と成熟依存はともに他者への依存を示す因子であるため、大学生は両依存的な傾向を有していると考えられる。

Table 2 依存の自己評定質問紙の因子間相関

	依存欲求	依存拒否	成熟依存
依存欲求	1.00	- 0.01	0.53**
依存拒否		1.00	- 0.36
成熟依存			1.00

** $p < .01$

2.TAT検査についての検討

TATの反応の特徴をみるため、依存性自己評定質問紙の3因子ごとの得点について分類した3群を用いて分析を行った。TAT反応の分析には戸川(1953)の分析手法を参考にした。また、各因子の平均値および標準偏差において性差がみられなかったため、TAT反応の男女差については検討しなかった。

さらに、依存の自己評定質問紙によって得点が高かった者のTAT反応について検討するため、実験参加者の因子得点をもとに、各3因子それぞれの高得点群を抽出した。その結果、「依存欲求因子」の平均得点が3因子のうち最も高かった者については11名、「依存拒否因子」平均得点が最も高かった者については2名、「成熟依存因子」平均得点が最も高かった者は17名であった。また、依存欲求得点の高かった者、依存拒否得点の高かった者、成熟依存得点の高かった者のTAT反応カテゴリーの一例を、それぞれTable 3からTable 5に示した。

依存欲求因子得点の高かった者TAT反応を検討した結果、「変化」や「無活動」といった欲求および行動が多くみられた。物語の内容としては、「両親に言いたいことがあるが、部屋から立ち去ってしまう」といったものや、「目の前で遊ぶ家族を見て、失った自分の家族を取り戻したいと考える」といったものであった。また、「人形を取り合って友達と喧嘩してしまい、仲直りしたいなあと考える」という反応や、「迷子になり助けを求めて泣いている」「迷子になり、親が探しに来てくれるのを待っている」というものがほとんどであった。

Table 3 依存欲求得点高群の反応カテゴリー

図版2	就職先が見つからず、ホームレスになってしまう
図版4	人形を取り合って友達と喧嘩してしまい、仲直りしたいなあと考える
	人形を見せびらかされたため、怒って人形を汚してしまう
図版5	迷子になり、親が探しに来てくれるのを待っている
図版6	素っ気ない恋人にしばらく会えず、落胆した女性は男性と別れてしまう
図版7	会社をクビになってしまい、自殺をしてしまう
図版11	両親に言いたいことがあるが、部屋から立ち去ってしまう

依存拒否因子得点の高かった者のTAT反応を検討した結果、「長く連絡をとっていなかった友人との連絡を望む

(親和)や、「邪魔な上司を殺害して昇進していく(成就)」, また, 「両親の情けない姿を見て, 子どものままでいたい(確保)」など, 一貫性のない結果となり依存拒否においては特徴がみられなかった。

Table 4 依存拒否得点高群の反応カテゴリー

図版2	自分の絵が燃やされてしまい, ショックを受けている
図版4	人形を見せびらかされたため, 人形の持ち主を憎み, 殺害してしまう
図版5	誰も迎えに来ないため, 両親に捨てられたと勘違いをしてしまう。
図版6	男が女の幽霊に取りつかれてしまう 長く連絡をとっていなかった友人と連絡をとりたいと望む
図版7	上司がいるため昇進できず, そのため上司を殺害し, 地位を獲得する
図版11	両親の情けない姿を見て, 子どものままでいたいと思う

成熟依存因子得点の高かった者の TAT 反応を検討した結果, 「迫ってくる恐ろしい人形から逃げる(恐怖回避)」や, 「お腹が空いて仕方がない子どもがなんとか食べ物を手に入れる(飲食)」, また, 「迷子になってしまい, 他人に助けを求める(救助)」といった反応がみられた。なかでも最も多く反応として現れたのは「成就」であった。内容は, 「女性が好意を寄せている男性に想いを伝える」「喧嘩していた両親を子どもが仲直りさせる」といったものや, 「自分の夢を叶えるか家業を継ぐことで悩んでいる少年が, 自分の夢を叶える」といったものであった。

Table 5 成熟依存得点高群の反応カテゴリー

図版2	自分の夢を叶えるか家業を継ぐことで悩んでいる少年が, 結局は自分の夢を叶える道を選択し, 進んでいく
図版4	自分を殺そうとする人形が迫ってきており, 必死で逃げる 自分では到底買ってもらえそうにない人形を持っている女の子が羨ましくなり, 人形を貸してもらい, 皆で遊ぶ
図版5	迷子になってしまい, 近くを通る他人に助けを求める 喧嘩していた両親を, 子どもが仲直りさせる
図版6	女性が, 好意を寄せている男性に想いを伝える
図版7	お腹が空いて仕方がないため, 物乞いなどをして食べ物を手に入れる
図版11	喧嘩した両親と仲直りをするため, 両親の部屋を訪ねる

以上の結果から, 依存の自己評定質問紙の因子間相関においては, 依存欲求と成熟依存の間に中程度の正の相関がみられたにも関わらず, 依存欲求および成熟依存の TAT 反応の関係性をうかがうことができなかった。そのため, 本調査においては依存の自己評定質問紙で測定された依存性と TAT で測定された反応が, 同様の性質を捉えているとは限らない。両者の性質を特定させるためには, TAT 検査の測定値を数値化するなどの必要性が考えられる。

考察

本研究は、大学生の友人関係における依存性に焦点をあて、質問紙および投影法を用いて表面的な側面と内在的な側面から、依存性の特徴および傾向を検討するという目的で行った。

1. 依存の自己評定質問紙における性差

まず、各因子得点において性差を検討するために検定を行ったところ、有意差は認められなかった。これは、回答人数が少なかつたためと考えられる。有意差は認められなかったものの、依存拒否では男性の平均得点が19.60、一方女性の平均得点が22.60と女性の方がやや高い結果となった。これは関(1982)および久米(2001)の先行研究による、「依存拒否の高さは男性に特有である」とは異なる結果が得られたことになる。この理由として、社会的背景の持つ性的役割の変化が考えられる。今回、本研究において使用した質問紙を用いて行った先行研究は1982年と古く、当時、男性は成長の過程において自立することが強く望まれ、人に頼らない態度を身につけさせられていた(久米, 2001)。そのため、先行研究では、男性の依存拒否得点が高かったといえる。しかしながら現在では、女性の社会進出により、年々女性の就職あるいは重役への就任が増加し、それに伴った晩婚や未婚が増加している。すなわち、社会進出により責任感を感じ、女性においても男性同様、人に頼ることを拒否、否定しているものと考えられる。このことから、女性が進出するようになった社会において、女性も男性と同様に人に頼らないという行動期待を内在化しているために性差が現れず、むしろわずかではあるが女性の得点が高くなったと考えられる。しかしながら、やはり今でも男性が働き、女性が家事をこなすといった概念や風潮が残っていることも事実である。そのため、実施する対象年齢の幅を広げることで、異なる結果も得られるのではないかと考えられる。また、依存対象を友人のみと限定したため、性差がでないという結果になったものと考えられる。依存対象を友人だけでなく、親や兄弟などに広げるにより、また異なった結果が得られるかもしれない。

2. 依存の自己評定質問紙の各因子間での相関

依存の自己評定質問紙の下位尺度である「依存欲求」「依存拒否」および「成熟依存」の間に相関があるかどうかを検討するために相関係数を算出したところ、依存欲求と成熟依存の間に中程度の正の相関が確認できた。これは、依存欲求と成熟依存は質的に異なる概念であることが示されているが、双方がともに依存的であることから(久米, 2001)、相関関係が示されたものと考えられる。しかしながら、前述したように、依存欲求と成熟依存がともに依存的であるものの、性質は異なるものを示しているため、高い相関が現れず、中程度の相関となったと考えられる。一方では、依存欲求と成熟依存という概念が明確に分化していないということも示唆しているといえる。また、久米(2001)による先行研究では、依存欲求因子と依存拒否因子の間に、弱い負の相関 $r = -.37(p < .01)$ が確認されている。しかしながら、本調査では同様の因子間に相関が確認できなかった。これは、依存欲求と依存拒否が独立したものとされているが(関, 1982)、必ずしも対立した関係にはないことという近年の依存性への概念の変容を反映していると考えられる。さらに、久米(2001)による研究では、依存拒否因子と成熟依存因子の間に、負の相関 $r = -.50(p < .01)$ が確認されていた。しかしながら、本調査では同様の因子間に相関は確認できなかった。その理由として、依存拒否は他者に関心を示さないといった性質を備えており、一方成熟依存は他者と相互的関係を構築するため、積極的に他者に関心を抱くという相反する性質を備えていることや、拒否と成熟は互いに依存的か否かという点で対立する概念であるとされているが(久米, 2001)、今回の結果から依存拒否と成熟依存が互いに対立する概念ではないということが示唆された。

3. TAT 分析について

依存性自己評定質問紙で得られた結果が、TAT反応においても認められるかを検討するため、実験参加者の因子得点をもとに、それぞれ「依存欲求得点高群」「依存拒否得点高群」「成熟依存得点高群」に分類し反応を個別に分

析した。その結果、依存欲求得点の高い者については、「両親に言いたいことがあるが、部屋から立ち去ってしまう」「目の前で遊ぶ家族を見て、失った自分の家族を取り戻したいと考える」「迷子になり、親が探しに来てくれるのを待っている」という「無活動」の欲求および行動が多くみられた。この内容から、解決すべき問題が出現したため、それをどうにかして解決したいと考えているが結局自分で解決できない、あるいは他人の助けを待つといった結果になっていると捉えることができる。そのため、「依存欲求得点高群」の者は日常生活においても同様に解決を他人に委ねるのではないかと考えられる。しかしながら、TAT反応については「無活動」のみではなく、「獲得」や「挽回」といった異なる反応も多くみられており、前述したように質問紙とTAT検査が同様の性質の依存性を測定しているとは言い切れず、そのため必ずしも依存欲求を示しているとは考えにくい。

また、「依存拒否得点高群」におけるTAT反応については、「親和」や「成就」「確保」といったように、結果に一貫性がなく、主だった特徴がみられなかった。これは、自己評定質問紙の依存拒否高群が2人と少なかったためであると考えられる。このように対象者が少ないため、TAT反応において特徴を見出すことは困難であるといえる。

さらに、「成熟依存得点高群」におけるTAT反応については、「女性が行為を寄せている男性に想いを伝える」「自分の夢を叶える」といった内容の「成就」が最も多い反応としてみられた。これは、他者に頼りつつも自分で問題を解決するといった日常生活での対応を表していると考えられ、成熟依存因子の特徴を反映していると考えられるが、「支配」という、成熟依存の特徴と結びつかない反応もみられた。一方、「成就」以外にみられた反応としては、他者に助けを求める反応である「救助」があった。これは、成熟依存得点の高い人達に、物語あるいは日常生活において生じた問題について、一人で解決に向かうことをせず積極的に他者に頼るという選択肢が備わっており、実際の場面でそのような選択が働いていると考えられる。

しかしながら、本調査において依存性およびその下位尺度である「依存欲求」「依存拒否」「成熟依存」が、TAT検査に投影されるという結果にはならなかったと考えられる。その理由として、TATが本当に測定したい依存性を捉えているのかという点において明らかではないということが挙げられる。これは、質問紙で測定した依存性は、個人の持っている特性的なものであり(久米, 2001), TATで測定した依存性は個人の特性的なものではなく物語を作ることによって感情移入してしまい表出されたものということが考えられる。

また、TATにおいては、これまで投影法の短所の1つとして指摘されてきているが、物語を分析する段階で、検査者の主観が判断に影響してしまうこととなった。そのため、今回有意差が現れた箇所においても、日数において実施直すことで、異なる結果になる可能性も考えられる。さらに、今回の質問紙調査および投影法検査の中で現れた依存性はおそらくほんの一部であり、これだけで大学生の中にある依存傾向が投影されたとは言い切れず、そのため、投影法で性格特性を測定することは困難であると考えられる。

そのため、今後は依存性を多方面から見るために質問紙を複数使用する、あるいは今回は実施しなかったが、実際に現在参加者が抱える悩みや問題を自由記述などで回答してもらうなど、さらなる検討の必要があるといえる。

引用文献

- 安達喜美子 (1994). 青年における意味ある他者の研究—とくに、異性の友人(恋人)の意味を中心として— 青年心理学研究 6, 19-28.
- 原田 華 (1999). 青年期の孤独感—質問紙とTAT物語から見た内的世界の様相— 京都大学大学院教育学研究科紀要 45, 393-405.
- Hurtup, W. W. (1963). Dependence and independence in 62 NSSE yearbook : *Child Psychology*. 333-363.
- Kagan, J. & Moss, A. H. (1960). The stability of passive and dependent behavior from group childhood through adulthood.

Child Developm., **31**, 577-591.

Kagan, J. & Mussen, P. H. (1956). Dependency themes on the TAT and group conformity. *Journal of consulting Psychology*, **20**, 29-32.

久米禎子 (2001). 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係—自己の安定性との関連から— 京都大学大学院教育学研究科紀要 **47**, 488-499.

松尾和美・小川俊樹 (2000). 青年期における「ひとりでいられる能力」について—依存性との比較から— 筑波大学心理学研究 **22**, 207-214.

Navran, L. (1954). A rationally derived MMPI scale to measure dependence. *Journal of consulting Psychology*, **18**, 192.

西川隆蔵 (2003). 対人依存行動の研究—対人依存の自己制御と自己意識, ソーシャルスキル, 及び対人適応感との関係の検討— 人間文化学部研究年報 **5**, 1-19.

岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究 **5**, 43-55.

岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と, 適応感及び自己の諸側面の発達に関連について パーソナリティ研究 **15**, 135-148.

関智恵子 (1982). 人格的適応面からみた依存性の研究—自己像との関連について— 臨床心理事例研究 **9**, 230-249.

高橋恵子 (1968). 依存性の発達の研究 —大学生女性の依存性— 教育心理学研究 **16**, 7-16.

竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究 **52**, 310-319.

田中 優・高木 修 (1997). 中学生における社会的依存要求の特徴について 社会心理学研究 **12**, 151-162.

津守 真・稲毛教子 (1960). 幼児の依存性に関する研究 教育心理学研究 **8**, 210-220.

戸田行男 (1953). TAT 日本版絵画統覚検査解説 金子書房

Examination of Dependence tendency on university students:
by using questionnaire and projective method

Tomomi Igaki, Takehiro Tamaki and Mika Himachi

The purpose of this study is to examine a characteristics and a role of dependence for undergraduate student. As a result, it became clear that high dependency need student showed “affiliation” and “achievement”. Consistency reflection was not shown in high rejected dependency student for TAT. And as a result, it became clear that high integrated dependency student showed “avoidance” and “succorance”. However, similar dependency was not shown in dependency scale and TAT. For the reason, it is clear that difficulty to examine personality traits by using TAT.

(指導教員：樋町美華)

